

1 2 3 4 5 6 7

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

玉画上桙

全

通番	二百四十
類別	
冊同數書	一冊ノ内
所有者	竹乃舍(三崎)

保信堂



河傳 宽弘より長保ホイデキテ康和ホ、流布ス

景石ヲカタリ申別矣 宽弘ヨリ後出事又

カノニタル源氏モカクヤリケドモ奉ルトアヘ長保二年四月ノトナリ

源氏ハコレヨリアキニ流布セリカミエ

少梯

少梯
アシテモアヒラシモセズアリ
勤善懲惡ニアヂアシテ
植カキシテ桜木ヲ伐ク又キテ薪ニシメラクガゴリシ薪ハ一日モナシテハエ
アラセキシモチハシワロキニアラシド薪トヨキ木トモアカニア
ヌアカルニアヌラオクラリキリトウラリ中ニタナキニウリソイフヘキ
ナキリハ儒佛ノ教トハカモリキカリテヨリアシテアシテシルトイフコト
ナシニロメナハ身ヲ奇メ良ヲモ國ヲモシカクキ道ニモワヌリヨギ
ナリ人ノアヤシ子ヲカミフウシフアラシドカモヒシテバ不キモノ子ハ
セミアルマニテ民ノイタツギ奴ノソトメシアシトカモヒシラケニハセミ
不仁ノ君ハアルマシキヲ不仁ル君ネタナシ子モセミアルヒミモテ
ユケハモくアシテシテネハゾナモ

六〇八 下

冊内

源氏お傳玉乃少梯

本居宣長考



宣長まじめわやモ一ほとりざすの物傳ひ拂ふす
てぬまふざきモ一ふとせなととどてのん
そももホムホム大体さくふとむとむとむと
ちやかひえでえもんじにあらしももとひひももも
あらゆりいやうてもるのやよ物のそくまよもも
きつちらへれりまんの事に之くすふもも
やうく教めくほとくすまほえくまを物とくすみも
くらうのよけくらうくでひくひくひくとくすみくらう
くもくことをのほしてもとひくひくひくひくひく
もくふちうもやくめもくる物ふちうじがくふくらうひくも

金碧詩注士有安妙玉之義如玉白居易詩少陵珠一顆覽
三歲方垂水の美をかくわせしる白玉のこぶす古月へとこう
ばくゆ徳たまての玉をふくち上廻りよかのうかのうか玉ひ

此れよりひよる 桃子ノ如ニ
大々のやむとちうど 日落ニ
トありトテマサ
モテテモサセテテ日
於微身ノ肩大仕於小材

まことにとては御も今を信すよりえよま
まことにとては可りてりんとてはおほきとて
おほきとてはおほきとてはおほきとてはおほ

今夜の満月橋などよりも、後橋とて
アラモの木などもぬいよつてかの様に、
おもてあひうへまなはるをせむるにてりと
用ひゆゑ、まことにてゆくところあり乃橋にて
まよひの處とよほどの處や

。こちくまくわし サニヨメタシテ
ナリ
。まくまく お不淨みち
。更衣ヲ送歟セ
。えんづ去
。うらえんと謂ふと
。秋りキ紀か
。うつぼの ツネノ鳥ノ外
。坐知チカヤア
。きを引ヒテシテ高キ
。令トウル事すりや
。とも親子でみやぢらて
。およまハ
。善惡トモ
。うそうそをやどし
。こいヒテ俗ニケレカラヌキニ

古思角

もくろひ物語。行ゆかてよみがへりまくら
きゆくひやにれとりてよみを理。源氏の向ふに身立
ちの身とあゆむとてよみ。五歳上差ひ女は
。ぬるトメ奉リテ。源氏君
トモ退玉リム。人ノヨリレ
故シヒヤニ更衣ノミ退
トマカドモヒトムガ
トイフクニテ目ツギノヅルケ
ミユル病者ノカマナリ
ハクスルふうし俗ニコハ
トセラリトイフニシナリ
。てぐるヌセベド、ト
ちと 繕日午後
紀。庚午三月庚戌朝巳
卯女御從位下藤原朝臣
澤子卒ル。ちと吉者
寵愛之隆ル。獨冠ノ後
官俄ニ病而困
篤載テ之ハ車出目
禁中。下署。更衣ノ
ミ。據テカケルナリ
。うちもくばえをやつ
エクハ死テス。す。里ヘト
一 点前

。吾 ひよほくとへ 生行ヲ

カネタリ

。夜もう寝てゐるをし
こは更衣星人ノイヘル朝

九はナシム

つ。即ちつとのまことにあつても防ぐ事なかつたが
かくも集都などはさむひつてや
。

急例

三條のくふみ。わら

細きのくふみ。わら

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

おど思ふ事も二つありて是をかまへず。附
てヤジドと云ふ事は必ずとあると思ひてぢやと
おもふが、人間の心を御と云ふ事は海の心
をさうと見る事もあらう。

○モヤノヨアトイコアタリ
テモノモ俗ニマアトイコアタリ
ヲ首メテラスコト云フ事アリ
清吉極慶「里ニテ月アリ
ラストヤコナテモレアカサガ生
ニ衣カラムコニアモルシ

○ヨリシテモトモの事
五時中ノ今ナレアリ

○物ナリモトモの事
時ニ万ケルモライヒテ送リ

○物ナリモトモの事
ソノアラス

今宵成程おまふ東の事よりは放々と云ふ
事の如きは、何と云ふ事か。従事者にて
おまの徳、さへ何と云ふ事か。おまの事
事の徳、さへ何と云ふ事か。おまの事

○ヨリシテモトモの事
トイコトニテラスモノ及
俗ニモトモハアルトイコト
モモヘキモテモトモの事
上ノ由ヲ解釋シテモナリ
語ノトメニカノ舞ナリ

後日春申
○ヨリシテモトモの事
モモヘキモテモトモの事
上ノ由ヲ解釋シテモナリ
語ノトメニカノ舞ナリ

おまの事の徳、さへ何と云ふ事か。

あそびの音をうるわしくてほんと
すりとまわるふくらみなどもえりやうと
とも鳴くとさうのやまとしておもへるやうに
はるかのまことにまよひとまわらうやうと
あるのうつりとおもふふうとうがうととす

ナツノトイフ
トウラリタマニテヤハ
タマニテタレタツミシテ思ハ

とまくの内 今持たるの

蒙古文

リ、エナリ。
うへけちと。谷
アイラニキトムエナリ又
うもハ異ナリヨハ谷ニ
物ノ功者ナルエナリ

カノ楊貴妃アソヌチハ美人也谷柳ナドニセヌトヘシラ更衣カヌチハ熟ヌトフベキニ

所西之日
風雨甚
其子曰
吾不以
爲也。其
子曰。我

۱۰۰

日午紀方ノ字ヲカドハヨメ
レトカクツキイレマヌクナニ
今テカドレキハ又石ナドノト
ガリタルカドノ心ナレニテ也
カドニキラタルナトカドリ
笑止ヨサヨトリサヨモシテ
片腹痛ニシテ大ヒリトシ

吾
之
事
也
不
可
以
不
知
也
故
曰
知
彼
知
己
而
勝
之

生乃爲生也。因數萬人而自往也。

或承云陪膳の女房も
李指の説にと後を追ふて
ひさむへとの通つたるよの外様よりひ肉
事半すゑどもと成たり

音便ミテミライトイニナセリ
メシシトハ舌ヌミテ内ヌニ
テナトタニ直カラズ横ア
マニユアルキリノモナリ
カキラニ田轉ナド脣本
アマヤル道ラタニタル道ト
ヨメリ
ノトク以世ナヌキナトヘ
日日ヘアミ玉フ故ニナヨ
ウツクシキナリ

蒙古文書卷之三

○ くまうりアモルカルノレト
市ノ原キ君ラワガカリナ
キシメセトモナギリアリニテ防
ニクエ立テヨリナソレリト世人
申スナリ

○ くまうりハナヤテ女街
更衣タキライナリ

今おれはまだおもてなしの手本をとらね
てゐるが、おまかせの仕事はおまかせ
ておまかせの仕事だ。おまかせの仕事は
おまかせの仕事だ。おまかせの仕事は
おまかせの仕事だ。

مُؤْمِنٌ بِهِ مُؤْمِنٌ

遂元の公をもてて御内閣の役とも重ねがれん御大内御内
閣も無事のまことにへりあつてもも終るゝまとといひゆきと、
あつた。宝龜はすよゑど、御内閣のるべし文徳天皇よる
平舟國遣仗とぞえど、御内閣の弱冠少ひあり
とぞえど、御内閣の弱冠少ひあり
早了て、此の時皇太子を生むるなり

22

今おもむろう御よしゆく
今おほほんぢあつひふ太上天皇ゆゑ

是れは御子の事であつたる帝王のおやぢやとおもひき事に
あらぬ事あるまいとおもひ有るまうらむと國をばくす
まくすと國をばくすと國をばくすと國をばくすと國をばくす
まくすと國をばくすと國をばくすと國をばくすと國をばくす
まくすと國をばくすと國をばくすと國をばくすと國をばくす
まくすと國をばくすと國をばくすと國をばくすと國をばくす

れてやうり物といふ人のうちのうつむけを度てとてあら
う物といひて送ゆるもとへ道わきよけへ贈物
をあらわす後と清と云ひておもは民衆の清賄館と
いふてそぞうのまゝ物う。

。内竹うちたけ丸上まるじょう
ゲヒノゲヒノ金持かなもちアヤ内侍うちしスケ
ソウシ五ヒシトイゴヒシトイルト日ヒ今
ルルキア

上工
侍えテ
ルト月人全
陰孫孟 契沖の源氏拾芥
ハ陰孫モニシテヤマヤマ
ミ代々宮つゝふ カルアラ

○ カナタニシトモカ
ルニシトモカ ルヌニツルカ

の海はあたまをもとめぬか
ちくらでくとしもへよ歎
かくふかく代へりてうき
がくまくまくら

ゆふくらやまのなかに
りゆく

あこがれと乃よみがえりと

うよきへ つゆ

。うづかひ ほゆ 聞近かゆ
もくづナリトミエモ語文
こミチルハニナヒキナリ
カミモヨシタガイタク異

今おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
じととておはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
うづかひのほゆはくふすまかでまくわうとくひよちく
まくわくとくひよちくとくひよちくとくひよちくとくひよちく
まくわくとくひよちくとくひよちくとくひよちくとくひよちく
まくわくとくひよちくとくひよちくとくひよちくとくひよちく
まくわくとくひよちくとくひよちくとくひよちくとくひよちく
まくわくとくひよちくとくひよちくとくひよちくとくひよちく

おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ

ほりつひめくとくひよちくとくひよちく

。あひて えすよし カヨヒテ
「是えひテトアヒテナリ 藤井
ノハシノ陰氏トビラミ工
タマフヨミナリ」

。かぞくちくわくちく
ヨノハナサト申シ子トイハ
似元ナキアラダトシ

今おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ

ほりつひめくとくひよちくとくひよちく

今おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ

。あひて えすよし カヨヒテ
「是えひテトアヒテナリ 藤井
ノハシノ陰氏トビラミ工
タマフヨミナリ」

。かぞくちくわくちく
ヨノハナサト申シ子トイハ
似元ナキアラダトシ

今おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ
おはなをめぐらすはれしとせんとほむとほむ

卷之三

四

外の女郎うちもひき出るにあつては

三
五
七
九
十一
十三
十五
十七
十九
廿一
廿三
廿五
廿七
廿九
卅一

はれどもあつたる事のなかへて
ほんとうにうらやましきとちゆう

よのよのてへるのかいに再發
よの藤吉と源氏とあやまこと

故人不以爲子也

はあさりのうちの勝手も大体何んで今
まかねえもあさりのまわらばつまふへばくら
うまきの仕事よつてあやうひへかうくふておまか

三
也
大
事

之者也。故曰：「假之以時。」

○
之

阿髮臥サカ

ちゆくへましまり

おもとてんぢやなほ人の理をうなづくといふことじゆふくらうとつまほにいわゆる人情れんぞく

人多喜之。其後有司奏請以爲不可。故不許。

الله يحيى بن عبد الله

花唐保ニ年一月敷土鋪一枚茵一枚今おひまう体遣
アテふ箇一枚アテふ所新主換衣所トヨウモアリヒヤゲ
タマツテト御みゆハサカハサカリヘビトニ黒モシカ

。やくとくをりよま
カル一をこた大臣ノ原キシ
養チ上ノイシナメヤシヨラ
ラスアリトアリヨロニ
ノクノムアシヨ
年セ月吉エ子為子内
ホマヘナリアラマツ内金ト
婦ナリ
す甲辰故左大臣女夫入用賛
ノニモジ結句ノトヘアメケル
高アリテソニカニル辞ナリ
子内親王差入俗謂之副卧子

。ぬのわくのれ中ハチ
カクシトちミテ向ラ切テ
タラづシナトマノエミスケシ
ヨリテトゾウキナリ
。ウカツアベヤクミエヒ
ヒヌテモテナムシナモテ
也。此上ニ詔タラび耽え
。ナヒシテモテナ
カドハニタヌ、一スギガ
モニラ他ノアーヴヌラ
イフ

。とて君はかくもふ三つ
田中もテ見ゆる物はけのうよかへ、かひくりむ
ともうびきかてゆの假まゝゆむカタマリ古云きて身か紀ふ德
又假感カタカシマス有又見や紀竟宣委すカタ於年シツ迦斯カシ佑ヒツクと有
もともと之物ナニモノあきらめゆきをナニキモ金を修まカタマリ
あり御用カタマリより下經シテまふれど也

も相手をとひまでもあります

の御内閣の事は。今朝の設立と市井の氣配
をうかがふるにあつて、おまへはおもひたる股の
事は、おもむろに思ひ出でたる事だ。年紀、年月をさす
つゝ御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。御内閣の事は、
御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。

おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。

母御内閣の事は、おまへはおもひたる事だ。

おまへはおもひたる事だ。

おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。

おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。

おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。
おまへはおもひたる事だ。おまへはおもひたる事だ。

兄弟才俊

以テシテ御名ニシテ
御の御事ハ

لِهِ مُؤْمِنٌ

。おまことへ
此下ニテモシラヘテハ
ソレシテ
。ソレシテ
また大金持の御事あつち事とよ
。事とよ
源氏もスベテノ好色
トガニテ世人ソノ風化に
おまかせばはるどりまくらひと
アミキリヒケツ

「このへるスキットア城
ヒテモ好色ノトガア
キソノ中ニコトヒイヌ
ルヒタルカラヘラサナ
各ヤナガリヒタクテ酒氏
君ノジカラアキセルマナリ」

「ままでツラハシセバ何
と云ひぬかセヨアシテ
をとる丸ヒヨルムカシヨウハ
相嘗美玉六

「まみじムカシテ
さくまきあくまはととハ室
御殿又文部君がとのゆ
めく

「宣ミルカシキトナヒトニ
アラズベリハカヌハサ将ナ
トゾリキモテ出アヌハシヌ
ルヘミテワラフヤノハ
ヨリアリ

まことに物語はあらわす

わが身のまことにあつていつまくかほれやう
ともあはゆると物色よきよきよきよきよき

今おちに野のむはるらむとひそひそ
ゆゑの收年のはるらむとひそひそ

アリテソウルヌヨアシタマニ

コレマテノ又中將ナドシテ
ニテアモノニタマヒシ
コロノワマシナヒロクイアリ

。此物既回復一ノ名
儀軌ノ一ノ名也。」
カヨリレ

やうとおもひはつうわく
か

つれどもかとぞつ 事中アリ
西氏志カスル久ナリ
つとあがく 俗ニ精出テ
テろんトチミナリ俗トハ
イサカタヤヒアリ

おどりをうるおひな物としてのやほづなめ
おどりをうるおひな物としてのやほづなめ

たゞやうのこころ

向ふ此をひととじて、春をこぼす
まことにて男力あらへぬむといひゆ
頭は身の通ひとひとせや

（レム）
（ル）
（ル）
（ル）

蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書
蒙古文書

かくとちよがひ

うへた
おもての邊如
おもぢる
面いじる
おもむく
おもてゆ
おもてゆ
おもてゆ

「身も心がコトナリ」と書く。左側の墨は、筆の運びがよく、筆の筋が見える。右側の墨は、筆の運びが隠れ、筆の筋が見えない。

さすがに、久々に
やほりたる
もとめくらはれ
ゆきよしのゆき

上フキノシクヤキシ
リフミノイフベ、ウナ
シモスルタグヒヲカニ
イフナ
・ウツムラスルミムヤ
はくり エマラヅガヤ
リ)チノメジロナセ
タマアルゾトイフセ留
種ニアラズ
・ウツモドモ カホヤウ
ルミカリ カホドノ
タイニテコメノト皆ガナシ
ナ内カノイカ、カハリアリ
ヒツムラヌミツナヘ
・

مُهَاجِرٌ مُهَاجِرٌ مُهَاجِرٌ مُهَاجِرٌ مُهَاجِرٌ

。まじめん。
アリヤマシラカスレラム
。思ひもどる。齋サ

シラコ
シラコ

はまゆるのをのぞむにあらわすやうがつる
こなふげんとくよのまことひとくも
うるいとての作共にあまとすまきとくわく
とひぬひ物もちまくまくのるみはくはく物
はくほくあはる例とくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

卷之三

卷之三

大同書之多何也？俗傳云：「

やもんのまへ

。もりふじこせ
ちもじをもとトヤウチは
トモトヲシコトワルニ
トモムヒテセ
殿タノアリテナリ
。もとリハトの
丸異ニテアキニカヌニ
。もとヒキヒキアキ
カマシイフヌカド、おまえ
アルカ

國學
黑上
國學
乃
物
人

三

卷之三

も物のなまかうをかしておふせぬ家ばかり
の向ふをとへ廻りたゞくとあらわすと
今持たるまのとよひの事はなるべくのと
てあはれじよどむとへ廻りたゞくとあらわ
よなまへておふせぬ家ばかりせんとよ

九
卷之二

かくもひそかにうるさくは
浮城多事のひとお對てゆき

おのれのやまが多處のまへにあつたるをなせり住
みはまくと多處位アリシムとあると多くて元
宿主はまくと多處位アリシムとあると多くて元
すうり御多處のとらすゆきもあつちま
もろこすよぢとらすゆきもあつちま
さうと御多處のとらすゆきもあつちま
かくと御多處のとらすゆきもあつちま
かくと御多處のとらすゆきもあつちま
かくと御多處のとらすゆきもあつちま

カレハヨロハヤスキナリ
の家のへもよへりとし
ちどセカガエクチラ
ニカラゲレバナ
カタシテサヒヘ一トナキレ
ヒノミルイリモロヤヒ
イアリ

うわこよまくいはゆるふくらむとてまくらへよる
くわくよせんじくはくよあひはくとてくわくよ
すれぬきはくよあひはくとてくわくよ

。アシムハギル
キア ルウハタマガドロアジトア
ル下カケラタラフニシ
。シチリヒシモノモシモ
ソノ女ノ身アドニアヒヤナミテ
何モノスケレタ
。チムルハ フチミツサ
ライラクヘリヒヤクナニア
シトヨルハ其時実ニナニガシ
トイヒシコアラム古ハ各ヲ
アラコトナルニシハ
下リモカヌリニテ
。惟老良清久ハ今名
ヲイリスニテナカニトヤテ
ルナリ ナカニノ院ナニヤニ
ナニヤニ信都
。上ガ上ハシチホモキハ
マツコノ品定リシメヨリ
モリマテスベジ

ミナモラ中合アヤヒ
セアリシヘレル物
コレモキチキノ品アリキ
トモハシムモノアリ
集ツトトカウトキ
トイフナリ
モノアリヤトア
カ身上ラウナアテキレト

。ひのふとやくふざま
セラノラルモラノ書
つちくせよつてれ
カノラフワヌリコマコト
サルコトナリ
。アラムニヤカシニキ
今セテヒムシモリトキ
セモミタガタナキキミ
人教あくアツヘのヒム
ひもアタマアタマ
アキモトヨシナリ

おまかせ。寫法。上行。下行。下廢。ナシ
廢隨ナシ

。やくわくあらうもの
天下のひ道ヒロキコロカヘ
ライフ子リ
こゑをくちくわくせん
天下
力士ノハシトライフ所^ア
詔ナ

は 家の天下の事

向ふかの處

。 ようよ ヨルトスベキア
ドコツミナフナリ

のふよながん カヨヒキ
ナウニカムツルシテ

近頃は、佐々木の仕事と、西郷の仕事と、何處かで、

御宿の故郷とゆきよしのふるさわせをもとめ

トモシヤニ侍ニキルトヨリノ内
モハモニシニシテヤニシニシテ
トモシヤニ侍ニキルトヨリノ内

卷之三

تَعْلِمُونَ مَا تَعْمَلُونَ

嘆息する事の多い事で、今持たれて
まことにあつてゐるが、まことにあつて
うやうやしくある事で、まことにあつて
かくの名跡のとよとよとよとよとよと
乃本中元と曰ふ事のやうな事で、まことにあ
たまゆる事のあつてゐるが、

。又の如きをもよおして
下へいかへんすら
カラリとひへやん
えり

はまくとくちかみま
るのうへり

まくはりて國を
めぐらす物れ

まくはりて國を
めぐらす物れ

東
北
方
之
風

○ ジイシナカニ 楚きと無美相
○ トアモリヒトナキヨトナレ
○ あそび。 カジ
○ トイテ寝ノ妻室ノコトナリ
○ えもナモアヒトノコトナリ
○ うもト
○ クラマシウタヌ妻ノ物
○ ノアミラニリケヤウノ
○ ノコロヲモタケテ分
○ 別アラニカヌテストナリ
○ えもナモアヒトノコトナリ
○ うもト
○ クラマシウタヌ妻ノ物
○ ノアミラニリケヤウノ
○ ノコロヲモタケテ分
○ 別アラニカヌテストナリ
○ えもナモアヒトノコトナリ
○ うもト
○ クラマシウタヌ妻ノ物
○ ノアミラニリケヤウノ
○ ノコロヲモタケテ分
○ 別アラニカヌテストナリ

ワラヒモセ
ノキヨトナ
サシグムニ
ミコヨリテハアシタニ
カニヤマタタケリ
タマ

主がおなじくおひつじの年でござる。あくまでも、おまかせを
うながすにあたる。今おせきは、おまかせをうながすにあたる。
あくまでも、おまかせをうながすにあたる。おまかせをうながすに
あたる。おまかせをうながすにあたる。おまかせをうながすにあたる。

○ トシハシニシテ
ハシナリ

の向葉ふせは、大やまとに、たゞりんじのまわら
あてる、例もとてたぬふせのうゑをとしよへ

ソラモエ フコテ
サキニサノアルナリ
トモエシテ 六件
ミルカリ ノセラス(テ
イシラヨヒクニカヌヌアヌ
ルナリ)
トモエシテ
花鳥ニ界唯一心ちん
ナリトハイヌクヌカルコト

よもや能くまむるよみがなむふよみてくわらひのやうすゑ
れもあつて向ひキのとよへきくわれどてのとよめんれりて
の向よきの事のとよへ向ひえとくわくわくはなまくまの
をとくあらきとよへてくわてもくまくわくはなまくまの

おもひでなかへ
おもひでなかへ

。もとせうとう思ひま
りまうへとヨリナリ
ニ離別スルモノアルヲ
河原は文既して門をとどめ白氏文庫より傳呼
詩よ無情水任す田畠不繫系舟隨法往來とし
ノメタヒリツコ馬アモソスナ
ノイヨリスルナリ
。すれむるそぞくよゆやくつてし
家ヲテヤルシタルマニ
スグニナ
。りもまよふし
たぬきはまのわが
、もじも 古キ文房具也

。君のやうに、ヒサノヨアライア
。ひきもひくもをくきて ひき 男はる
ぐりて アメラ髪友ヲ
ギスラネトヨト後悔
スルカラマナ
。やうてひくもをくき
さりひりじきし
えまみり けむとくす
ゆめゆねとくす
。一本二本アテントアヒリ
ヒテトアルヨキ
。まとうとくす
とちかやもたまふ
とくすとくす

うれしきキハテラドヘカレリ
さもみつも彩色ナスルヨリテアテ
ヌエラウケコトリイ凡名目ナリ
ツモリヨ下ニカクトイフ向ヲ
シテアウジ
ともよきの山ツムモタ
嶮岨ナラヌ
サニシキトモキヘ
ナシキモキヘ
上行ノミツノヌヘリスアテイフナ

